

和洋折衷の教会堂

初期の教会堂は、ヨーロッパ人宣教師の指導のもと日本の大工たちによって建設された簡素なものだった。しかし、やがて日本人の大工が十分なノウハウを得ると、自らの力と地域の人々の協力によって日本と西洋の技術や材料を組み合わせた素朴ながらも優れた教会堂を作ることができるようになった。教会堂の外観はヨーロッパの様式や意匠を基本とし、内部は日本の伝統的な民家建築の特色を活かして日本的な習慣に合うよう設計された。例えば、人々は入口で靴を脱ぎ、床や畳に座って祈りを捧げた。

潜伏していたキリシタンのほとんどがカトリックへと復帰する一方で、潜伏時代の独自の信仰儀礼を守り伝える人々もいた。このような人々は今なお長崎地方に存在しており、「かくれキリシタン」と呼ばれている。

年表

- 1854** 日米和親条約調印。貿易のため開国を約束する
- 1858** 日米修好通商条約を締結
- 1865** 大浦天主堂献堂
- 1865** 信徒発見
- 1867** 浦上四番崩れ
- 1873** 明治政府がキリスト教禁止の高札を撤廃